者百人一首全

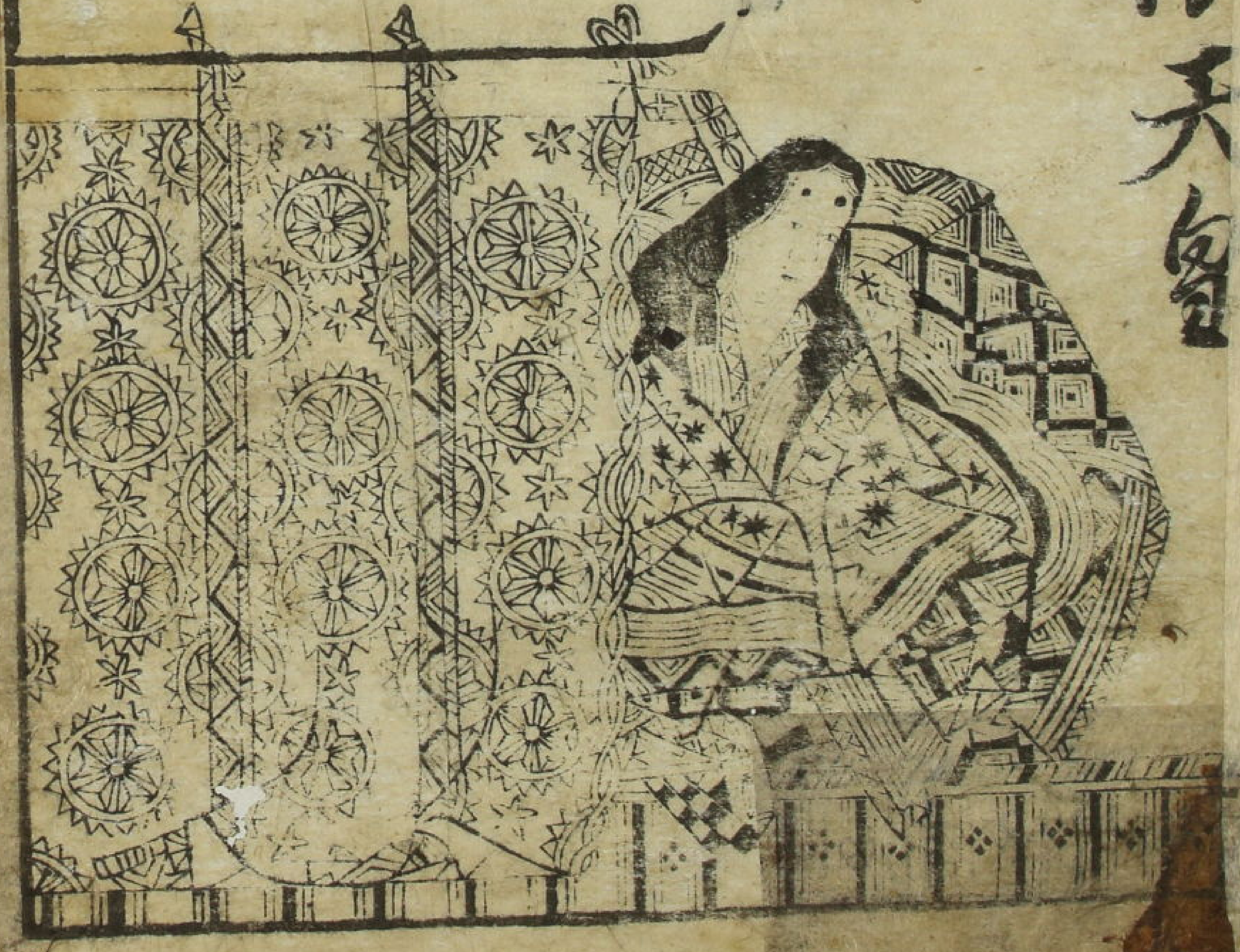
秋の田乃
かりほの
庵の
苫をあらミ
わかころもては
露にぬれつゝ

天智天皇

吉田

持統天皇

春過て夏
きにけらし
白妙の
ころも
ほすてふ
あまのかく山



柿本人丸

あし曳乃
山とり乃
尾のしたりお乃
なかなかし夜を
獨りかもねん

吉田[illegible]

山邊赤人

田子のうらに
うちいてゝ
見れは白妙の
ふしのたかねに
雪はふりつゝ

猿丸大夫

奥山に
もみちふみわけ
鳴鹿の
こゑきく
時そ秋はかなしき

中納言家持

鵲のわたせるはしにおく霜のしろきを見れば夜ぞ更にける

安倍仲麿

天原ふりさけ見れば春日なるみかさの山にいでし月かも

喜撰法師

わか庵は
都乃
たつミ
しかそすむ世を
うち山と
人ハいふなり

小野小町

花乃色は
うつりにけりな
いたつらに
わか身世にふる
詠せしまに

蝉丸

これやこの行も
かへるも別ては
しるも
しらぬも
逢坂の関

参議篁

和田の原
八十嶋かけて
漕出ぬと
人にはつけよ
海士のつりふね

僧正遍昭

天津風雲のかよひ地吹とちよをとめの姿しはしとゝめん

陽成院

筑波嶺のみねより落るみなの川恋そつもりて淵となりぬる

羽米沢

河原左大臣

みちのくの忍ふ
もちすり
誰ゆへに
みたれそめにし
我ならなくに

光孝天皇

君かため春の
野に出て
若な
摘
わかころもてに
雪はふりつゝ

中納言行平

立わかれいなはの
山のみねにおふる
まつとしきかは
今かへりこん

在原業平朝臣

ちはやふる神代も
きかす
竜田川
からくれなゐに
水くゝるとは

藤原敏行朝臣

住の江乃きし
による浪
よるさへや
夢乃かよひ路
人めよくらん

伊勢

難波かたみし
かきあしの
ふしのまも
あはてこの世を
すくしてよとや

元良親王

侘ぬれは今はた同し難波なるみをつくしてもあはむとそ思ふ

素性法師

今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つるかな

文屋康秀（ぶんやのやすひで）

吹（ふく）からに秋の
草木（くさき）の
しほるれは
むへ山風を
嵐（あらし）といふらん

大江千里（おほえのちさと）

月見れは
ちゞに
ものこそ
かなしけれ
わか身ひとつの秋（あき）
にはあらねと

菅家（かんけ）

此（この）たびはぬさもとりあへず手向山（たむけやま）もみぢのにしき神（かみ）のまに〳〵

三條右大臣（さんでううだいじん）

名にしおはゞ逢坂山（あふさかやま）のさねかづら人にしられてくるよしもがな

貞信公

小倉山みねの
もみち葉
心あらは
いまひとたひの
御幸まつなん

中納言兼輔

みかの原
わきて
なかるゝ泉川
いつみきとてか
恋しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬そ
さひしさ
まさりける
人めも草も
かれぬとおもへは

凡河内躬恒

心あてに
をらはや
をらん
初霜の
をきまとはせる
白菊の花

壬生忠岑

有明の
つれなく
みえしわかれ
より
あかつきはかり
うき物はなし

坂上是則

朝ぼらけ有明の
月と
みるまでに
よしのゝ里に
ふれるしら雪

春道列樹

山川に
風のかけ
たる
志からミハ
なかれもあへぬ
もみちなりけり

紀友則

久かたのひかり
のとけき
春の日に
志つこゝろなく
花のちるらん

藤原興風

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

紀貫之

人はいさ心もしらすふるさとは花そむかしの香に匂ひける

清原深養父

夏の夜はまた
よひなから
明ぬるを
雲のいつこに
月やとるらん

文屋朝康

志ら露に
風のふき
しく秋の野は
つらぬきとめぬ
玉そ散ける

右近(うこん)

忘(わす)らるゝ身(み)を
とは思(おも)はす
誓(ちか)ひてし
人乃命(いのち)の
おしくもあるかな

参議等(さんぎひとし)

浅茅生(あさぢふ)の
小野の篠原
しのふれと
あまりてなとか
人の恋しき

平兼盛

忍ふれと色に出にけり我恋はものや思ふと人のとふまて

壬生忠見

恋すてふ我名はまたき立にけり人志れすこそ思ひそめしか

清原元輔

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末乃松山浪こさしとは

中納言敦忠

あひみて乃後のこゝろにくらふれはむかしは物をおもはさりけり

中納言朝忠

あふ事乃
たえてし
なくは
中々に
人をも身をも
うらみざらまし

△

謙徳公

哀ともいふべき
人は
おもほえて
身のいたづらに
なりぬべき哉

曽祢好忠

由良のとをわたる舟人かぢをたえ行衛もしらぬ恋の道かな

恵慶法師

八重葎しげれる宿のさびしきに人こそみえね秋は来にけり

源重之

風をいたみ岩うつ浪の
おのれのみ
くたけて物を
思ふころかな

大中臣能宣朝臣

御垣守衛士のたく
火の夜はもえて
ひるはきえつゝ
物をこそ思へ

藤原義孝

君かためおしからさりし命さへなかくもかなと思ひけるかな

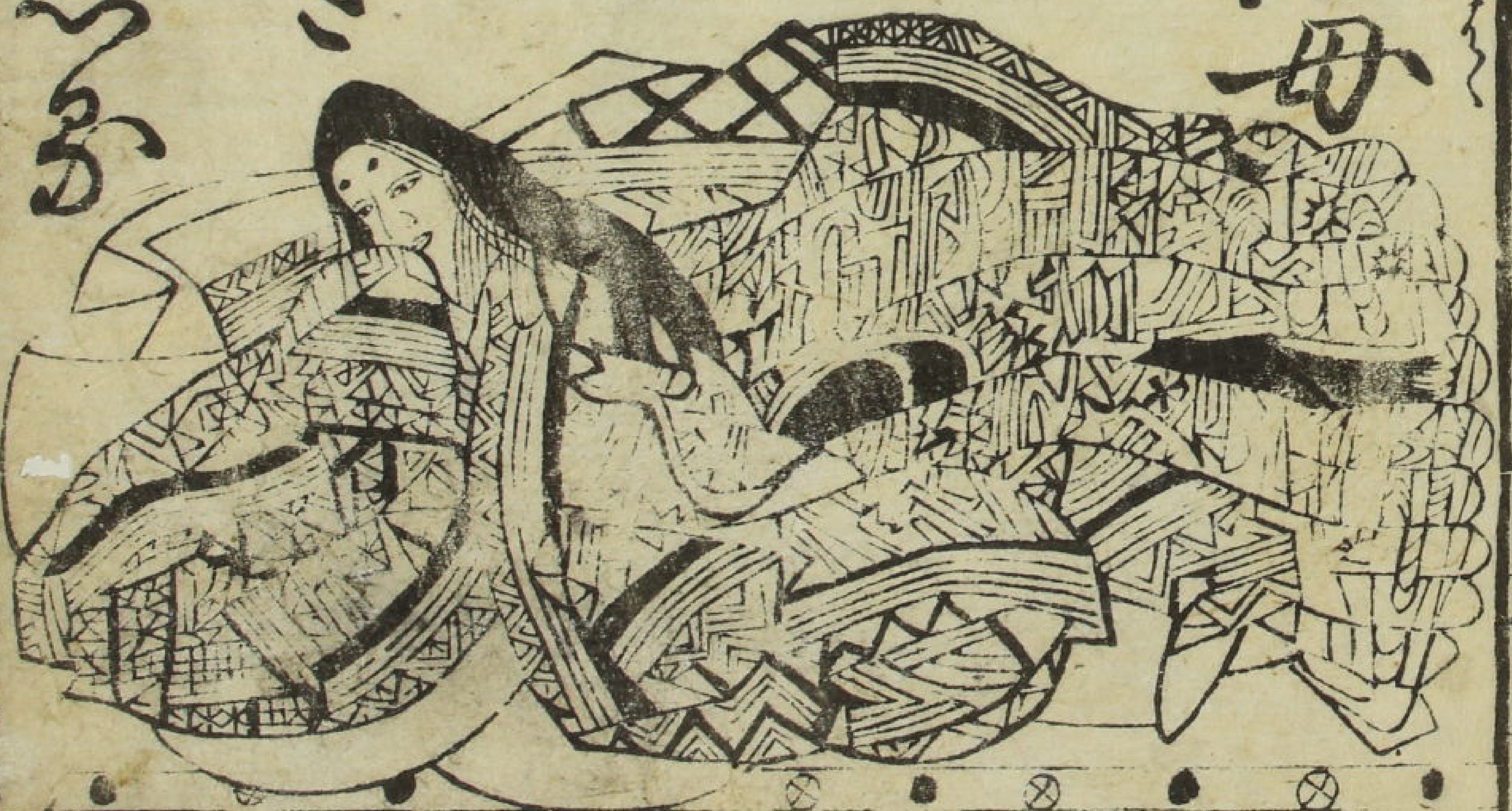
藤原実方朝臣

かくとたにえやはいふきのさしも草さしもしらしなもゆる思ひを

藤原道信朝臣

明ぬれは
くるゝ物とは
志りなから
なをうらめしき
朝ほらけ哉

右大将道綱母



なけきつゝ
ひとりぬる
夜の明るまは
いかに久しき
物とかは志る

儀同三司母

忘れし乃行末
まては
かたけれは
今日を限りの
命ともかな

大納言公任

瀧乃音は
たえて
久しく
成ぬれと
名こそなかれて
猶きこえけれ

和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出にいまひとたびのあふこともがな

紫式部

めぐりあひてみしやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな

大弐三位

有馬山ゐなのさゝ原風ふけは
いてそよ人を
わすれやはする

赤染衛門

やすらはてねなまし物を
さ夜ふけて
かたふくまての
月を見しかな

小式部内侍

大江山いく野の
道の遠けれは
またふみもみす
あまのはしたて

伊勢大輔

いにしへの
奈良の都の
八重桜
けふ九重に
にほひぬるかな

清少納言

夜をこめて
鳥のそらねは
はかるとも
よにあふさかの
関はゆるさし

左京大夫道雅

今はたゞ思ひ
絶なむと
ばかりを
人づてならで
いふよしもがな

権中納言定頼

朝ぼらけうぢの
川霧
たえだえに
あらはれわたる
瀬々の網代木

相模

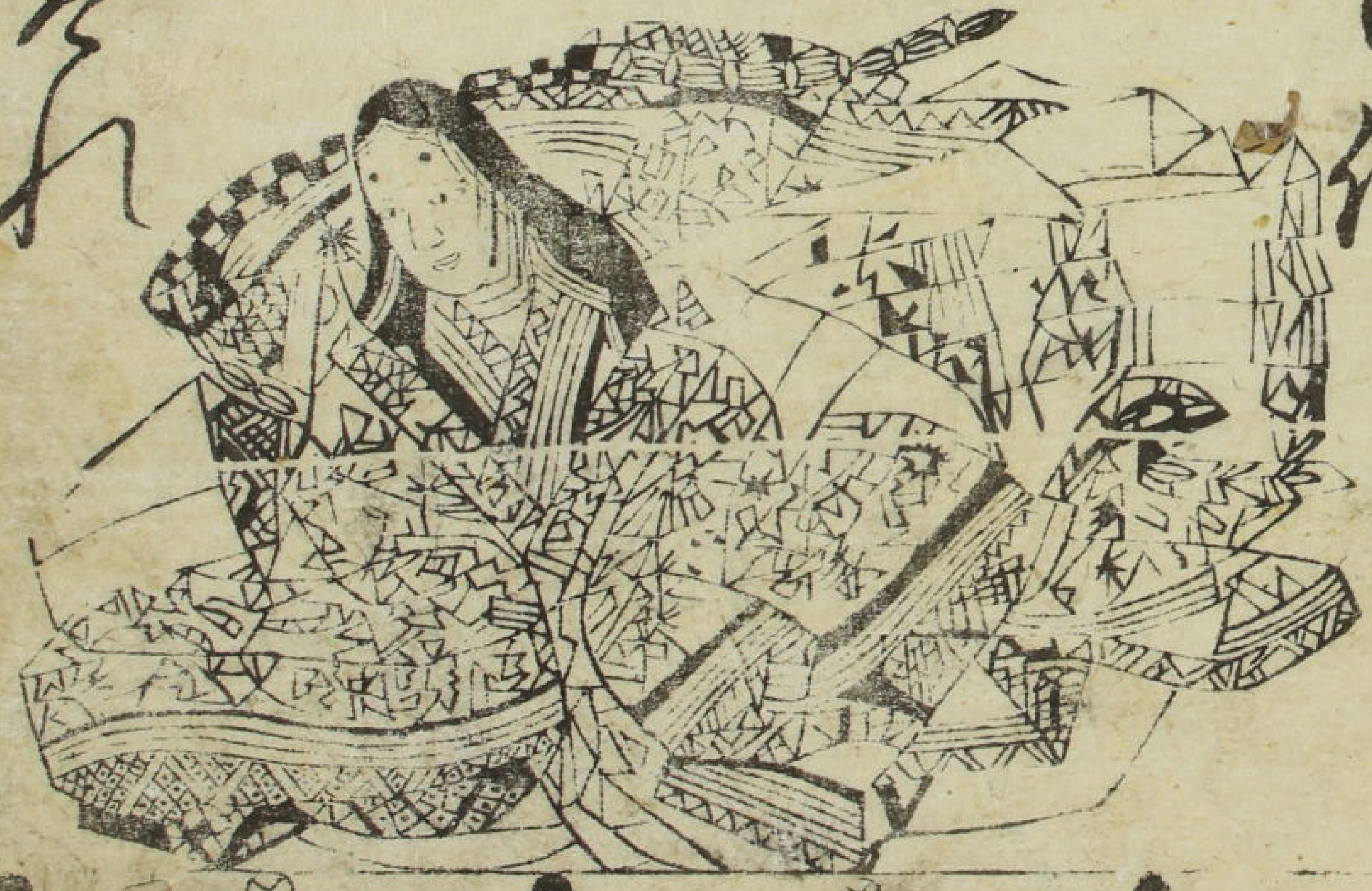
うらみ侘ほさぬ
袖だに
ある物を
恋にくちなん
名こそをしけれ

前大僧正行尊

諸ともに
あはれと思へ
山さくら
花よりほかに
しる人もなし

周防内侍

春乃夜乃夢はかりなる
手枕に
かひなくたゝむ
名こそおしけれ



三条院

心にも
あらてうき世に
ながらへハ
恋しかるへき
夜半の月かな

能因法師

あらし吹
三室の山乃
もみち葉ハ
龍田乃川の
錦なりけり

良暹法師

さひしさに
宿を立出て
なかむれは
いつくもおなし
秋乃夕くれ

大納言経信

夕されは門田の
いなはおとつれて
あしの
まろやに
秋風そ吹

祐子内親王家紀伊

音にきく
たかしの
濱のあた浪は
かけしや袖の
ぬれもこそ
すれ

前中納言匡房

高砂の尾のへの
桜咲にけり
外山の霞
たゝすもあらなん

源俊頼朝臣

うかりける人を
はつせの
山おろし
はげし
かれとは
いのらぬ物を

藤原基俊

契りおき
しさせもが
露
を命にて
あはれことしの
秋もいぬめり

法性寺入道前関白太政大臣

和田の原こき出て見れは久かたの雲井にまかふ沖津白浪

崇徳院

瀬をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれてもすゑにあはむとそ思ふ

源兼昌

あはち嶋かよふ
千鳥の
鳴こゑに
いく夜ねさめぬ
須磨の関守

左京大夫顕輔

秋風にたな
ひく
雲の
たえ間より
もれいつる月の
影のさやけさ

待賢門院堀河

なかゝらん心も
しらす
黒髪の
みたれてけ
さは物をこそ思へ

後徳大寺左大臣

郭公鳴つるかたを
なかむれは
たゝ
有明乃
月そのこれる

道因法師

思ひ佗さても
命は
あるものを
うきにたへぬは
涙なりけり

皇太后宮大夫俊成

世中よ道
こそなけれ
思ひ入
山の奥にも
鹿ぞ鳴なる

藤原清輔朝臣

なからへハ又此比やしのハれんうしと見し世そ今ハ恋しき

俊恵法師

夜もすから物おもふ比ハ明やらて閨のひまさへつれなかりけり

西行法師

なけゝとて月やハ
物を思ハする
かこち
かほなる
我涙かな

寂蓮法師

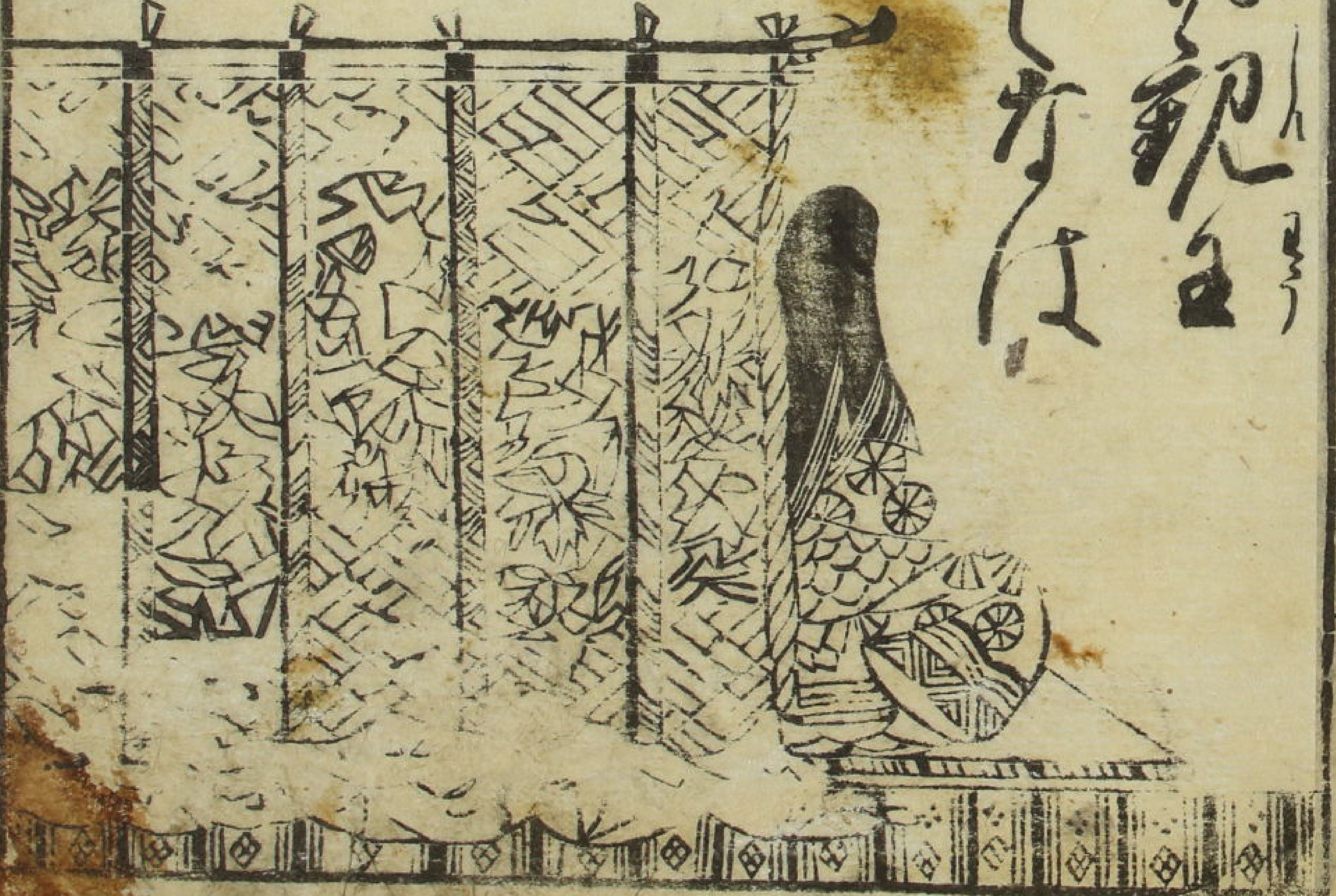
むら雨乃露も
またひぬ
槙の葉に
霧たちのほる
秋乃ゆふくれ

皇嘉門院別当

難波江の
あしのかりねの
一夜ゆへ
みをつくしてや
恋わたるへき

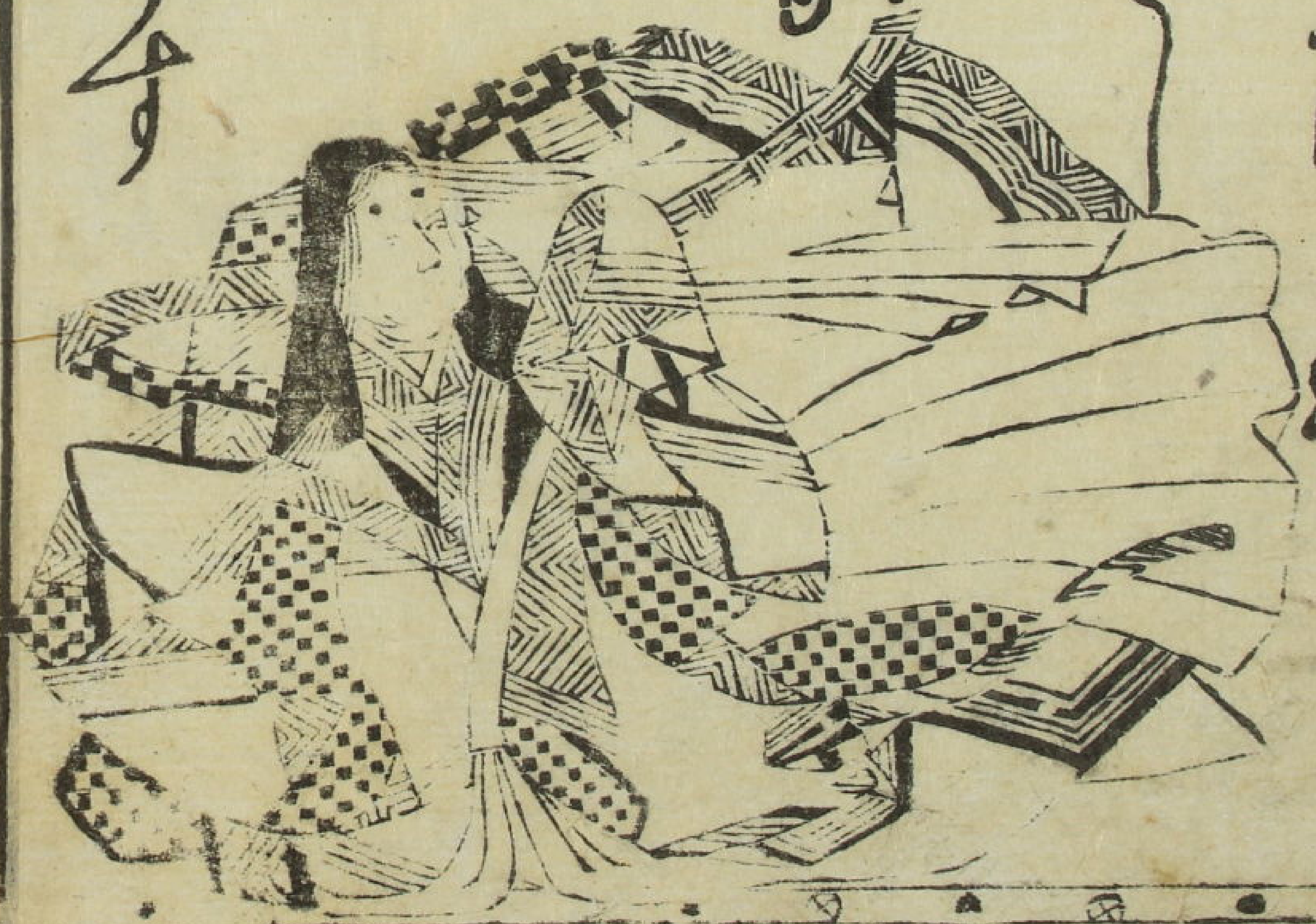
式子内親王

玉の
緒よたえなは
絶ねなからへは
忍ふる事の
よはり
もそする



殷富門院大輔

みせはやなをし
まのあまの袖たにも
ぬれにそ
ぬれし
色はかはらす

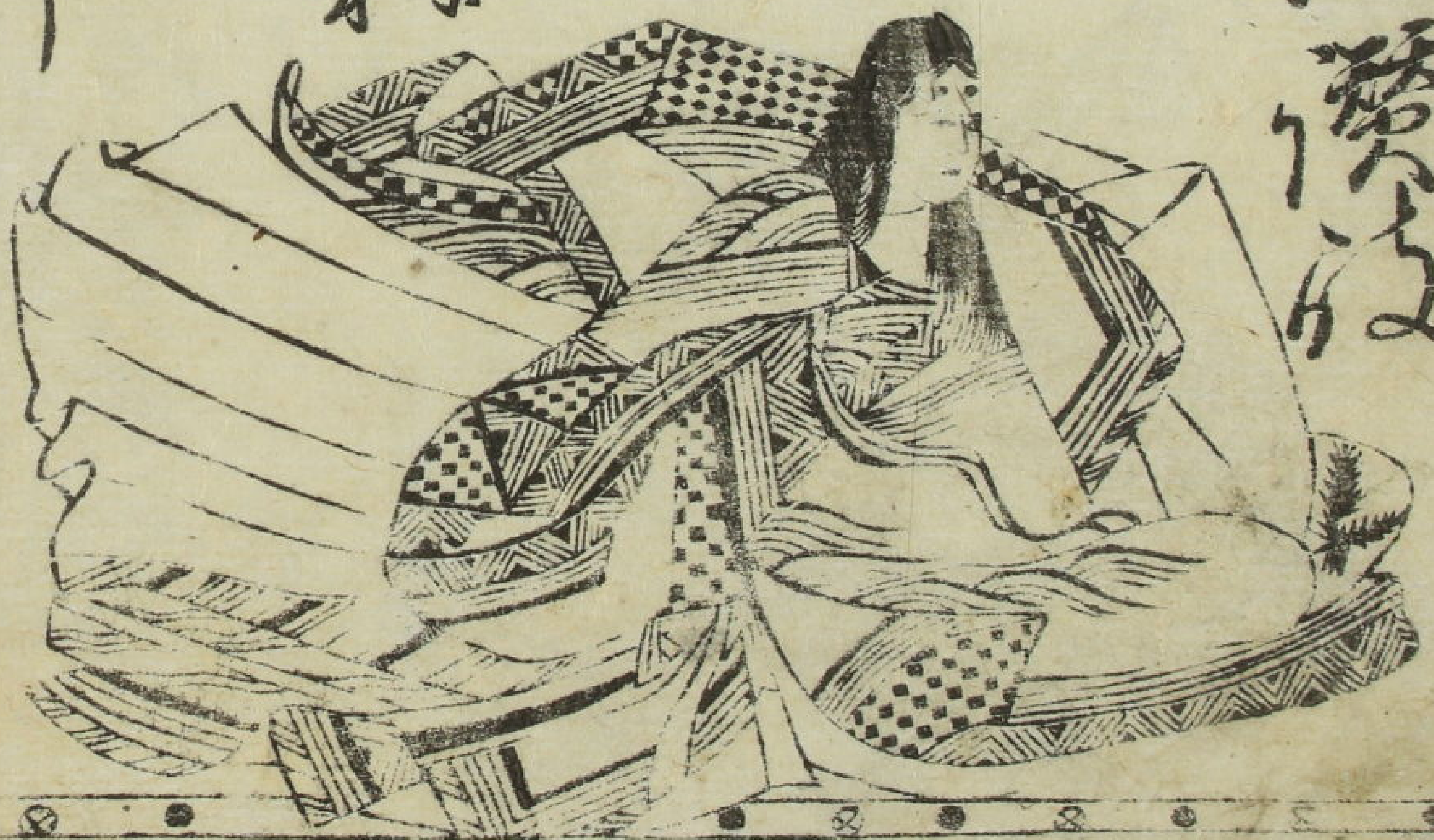


後京極摂政前太政大臣

きり〳〵すなくや
霜夜の
さむしろに
ころもかたしき
ひとりかもねん

二條院讃岐

我袖は
しほひに見えぬ
沖の石の
人こそしらね
かはく間も
なし



鎌倉右大臣

世中は
常にもかもな
なきさこく
海士の小舟の
つなてかなしも

参議雅経

みよしのゝ山の
秋風小
夜更て
ふるさと
寒く衣うつなり

前大僧正慈円

おほけなく
うき世の民に
おほふかな
わかたつ杣に
墨染の袖

入道前太政大臣

花さそふ嵐の
庭乃
雪ならて
ふりゆくものは
我身なりけり

権中納言定家

来ぬ人を
まつほの浦の
夕なきに
焼くやもしほの
身もこかれつゝ

正三位家隆

風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける

後鳥羽院

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は

下終

順徳院

百敷やふるき
軒端の
しのぶにも
なほあまり
ある昔なり
けり

京都書林　[illegible]
寺町通松原上町西側
菊屋七郎兵衛

明治二十五年旧八月吉日
大字漆山千八百十八番地
持主　吉田徳之助訂正